

山梨県若手研究者奨励事業 研究成果報告書

所属機関名 山梨県立大学 地域人材養成センター

職名・氏名 特任助教 森下 翔 ㊞

1 研究テーマ

山梨における「文化人類学的まちづくり貢献」拠点構築にむけた基礎調査

2 研究の目的

本研究の目的は、学生主体の地域貢献型教育プログラムを提供する「文化人類学的まちづくり貢献」拠点構築のために、山梨の文化・自然・経済資源を精査し、同県における文化人類学的調査の「研究ラインナップ」を構築することにある。この拠点は、教員・学生が協働して山梨の社会・文化を研究し、地域社会の長期的で持続可能な発展・まちづくりに貢献する地域密着型の学生教育を実施することを目標とする。

山梨には文化・観光・経済資源が豊富に存在している。ブドウやモモといった農産物、加工品のワインをはじめ、県内総生産規模としてはきわめて大きい割合を占める製造業のような地域経済上の資源もある。加えて、スポーツやアートといった体験も観光上の資源となりうる。本研究では、地域の観光ニーズの把握と貢献・実施可能性・新規開拓可能性の調査検討をつうじて「山梨歴史・文化・自然研究ラインナップ」を整備し、文化人類学にもとづく「まちづくり」の可能性を検討するとともに、地域の公立大学の教育プログラムとして適切な「まちづくり」貢献の在り方を模索するものである。

3 研究の方法

本研究は、教員および学生の継続的な文化人類学的調査研究の対象となるような山梨の文化・自然・経済資源を調査するものであり、その調査は以下の4つのフィールド調査と文献調査を用いて遂行される。

製造業調査

生産用機械・半導体産業をはじめとする製造業は、山梨という地域を特徴づける重要なセクターである。県内製造業は、デザイン人類学における「ものづくり」貢献のもっとも有望な拠点のひとつであり、学生の継続的な参加学習の受け入れ先となることが見込まれる。オープンファクトリーイベントへの参加・視察をつうじて、製造業における研究調査ニーズの把握と文化人類学的調査、および学生の参加的貢献の可能性を検討する。

ワインまつり調査

山梨県はワインの一大産地であり、観光のための特産品としては国内でも屈指のポテンシャルを秘めている。「ワインまつり」への参加をつうじて、国内外でのワインのプロモ

ーションの可能性について学ぶとともに、デザイン思考をつうじた学生参加の可能性を検討する。

アートシティ調査

地域芸術祭は、全国的に観光におけるひとつの有力なコンテンツと認識されている。瀬戸内国際芸術祭、大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレなどが代表例である。山梨では、富士五湖自然首都圏フォーラムプロジェクトの一環として、富士河口湖町にアーティスト・イン・レジデンス形式にて滞在する「6okken」が昨年芸術祭を実施している。本研究では、県内のアートシティ等の調査をつうじて、人類学とアートの協働の可能性を検討する。

エコツーリズム・スポーツツーリズム調査

健康志向の高まりのなかで、スポーツをつうじた地域振興が盛んになっている。なかでも山中を駆け抜けるトレイルランニング・レースをつうじた観光は、過疎地域における山林資源を用いた地域振興策として近年注目を集めている。トレイルランへの参加をつうじて、スポーツにおいて重要な身体的体験を把握する。また、自然に親しむエコ・ツーリズムへの参加をつうじて、県内における文化人類学的研究上の課題の可能性を検討する。

4 研究の成果

製造業調査

2024年7月に実施された「ニラサキオープンファクトリー2024」に参加し、韮崎の製造業の状況について予備的な調査を実施した。訪問した企業は、昭和産業株式会社とテクノクリーン株式会社の2社である。1964年に創業し、上ノ山に工場を構え、300人の従業員を抱え半導体製造装置等を製作するBtoB企業である昭和産業と、1995年に創業し、八ヶ岳を望む韮崎の農村のランドスケープのなかに工場を構えるテクノクリーンは、社風・従業員・福利厚生といった面でも好対照をなす企業であり、韮崎の製造業の原像の一端を把握することができた。観察をつうじて、開催情報の手がかりを得ることの難しさ、韮崎駅周辺ではほとんど開催情報を得られないこと、実際のオープンファクトリーへの参加をどのようにして現地の製造業の担い手の増加へとつなげていくのかといった、ニラサキオープンファクトリーの実施上の課題があるであろうことも想像された。

ワインまつり調査

2025年3月に実施された「韮崎ワインフェスティバル」への参加をつうじて、ローカルなワインまつりの近況について簡易調査を行った（2024年11月に予定していた「山梨ヌーボーまつり」への参加は、当日県立大において実施される本務のイベントのために中止）。「韮崎ワインフェスティバル」は、韮崎市制70周年を記念し、JR韮崎駅前で開催された、地元の人びとが気軽に参加することのできるワインまつりであり、ローカルでアットホームなワインイベントであった。大規模試飲会とは対照的に、比較的小規模なイベントであっても祝祭的な雰囲気を創りあげることができるというポテンシャルを感じさせるイベン

トであり、教育の見地からは学生にとって関与しやすい／関与したことの効力感を得やすいイベントであるという利点が看取された。

アートシティ調査

本研究では、2025 年 3 月に実施された「6okken」の参加型アート「拡張遊歩「まだ見ぬ世界」の歩き方」を鑑賞し、6okken の活動について関係者にインフォーマル・インタビュー調査を実施した。河口湖のオーバーツーリズムの解消とアートを関連させる可能性について、実際のアート作品を体験するとともに、関係者に話を伺った。極端に局所的なオーバーツーリズムと、観光業に携わる人びとのストレスは、実際にほかの観光客とともにバスで移動する中でも随所に感じられ、急激に増加する観光客に対応しなければならない困難の深刻さが体感された。また、2025 年 3 月に北杜市のアート施設「ガスボン・メタボリズム」を訪問し、関係者にインフォーマル・インタビュー調査を実施した。筆者は 2025 年 3 月に日本を代表する現代美術館である金沢 21 世紀美術館の招へいアーティストとの学生教育イベントを県立大において実施しており、同様の学生教育イベントの実施可能性についてガスボン・メタボリズムの運営管理会社の社長と意見交換を交わした。

スポーツツーリズム・エコツーリズム調査

八ヶ岳トラバース ロード&トレイルランニング・レース 2024 に参加し、八ヶ岳におけるトレイルランを体験するとともに、主催者である北杜市観光協会の関係者の方と名刺交換を行った（当初、富士山原始林トレイルラン、武田の杜トレイルランニング・レースへの参加を予定していたが、いずれも補助金交付時点において定員による募集締切であったため、参加を断念した）。トレイルランは清泉寮の牧場や観音平・天女山の絶景を巡るコースであり、いわゆる「足を使わせる」ハードなコースでありながらも、清里の魅力を存分に感じさせる、エコ・ツーリズムとして説得的なコースであることが体感された。また、富士吉田市を訪問し、ハタオリマチ関連の視察や新倉富士浅間神社や西裏地区のフィールドワークを行ったほか、山梨百名山にも数えられ、富士吉田エコ・ツーリズムの代表的拠点である杓子山登山を行った。山頂からは河口湖周辺はもちろんのこと、忍野村に立ち並ぶファナックの黄色い工場が一望でき、山梨の代表的な製造業のランドスケープを眺望した。強く印象に残ったのは、富士山の靈性に端を発するスピリチュアリズムの文化が富士吉田には強く存在していることであり、土着の民俗文化、ハタオリマチ文化とともに富士吉田における人類学的フィールドワークの潜在的な可能性の大きさを感ずることができた。

5 今後の展望

人類学的調査は 2 年以上の長期にわたることが一般的であり、今回のマルチサイト調査は、計画にもあるとおり、あくまでも「基礎調査」ととどまる。とはいえ、学生による長期的な調査研究の可能性を探るという意味においては非常に有意義な調査であり、各テーマにおいて観光客の受け入れ側であるホストと観光客であるゲストとの関係、「文化」の見せ方、経験の仕方、広報の仕方といったさまざまな課題が散見され、いずれに対しても学生参加の十分な可能性を確信することができた。

30 余年の首都圏-大阪都市圏生活から移住し 3 月より県立大学に赴任した筆者にとり、

上記のようなフィールドワークのみならず、日々の生活そのものが驚きと発見に満ち溢れた参与観察となっていると言ってよい。それらの生活や調査から発見された諸課題に対して、たとえばニラサキオープンファクトリーやワインまつりへの学生の参加・調査・実践といった形で、学生を関与させることで問題解決に取り組むゼミ活動を実施することは難しい。しかし、そのような形で学生に関心をもたせることで、実際に問題が解決するのかどうかということ、そして「毎年代わる代わる学生がやってはくるが、ほとんど地域に対して実質的な貢献をもたらさない」という、大学の地域学習がしばしば抱える問題を克服し、真に地域のための貢献をなしうるのかどうかといったことにまで思いを馳せると、その実現が容易な道ではないことが察せられる。

そのような貢献のためには地域を「知る」だけでは不十分であり、学生が社会変革のための実力を身につけることが必要であり、フィールド研究偏重ではなく、座学とフィールドの調和をとり、実践的な課題解決を行うことのできるような学生を育てる教育・研究活動を推進していく必要があると筆者は考えている。本学で2025年より開設された「創発デザインコース」は、3年間のゼミ活動をつうじて地域に貢献する学生を養成することを目指しており、鋭意教育プログラムの開発に勤しんでいる。

6 研究成果の発信方法（予定を含む）

本研究の調査をつうじて、学生主体の地域参加による教育プログラムのためのトピックを第一弾として選定し、「山梨文化・自然・経済研究ラインナップ vol.1」として整理・公開する準備を進めている。